

べて長方形になるという特徴がある。一方、主軸方向に注目すると、第135図に示したように、Ⅰ期はバラツキが認められるが、Ⅱ期・Ⅲ期にはほぼ2方向に統一され、N-60°-WとN-30°-E付近に集中する。Ⅳ期においても、前期の西に主軸が振れる一群を踏襲している。炉にも特徴がみられ、縁辺に打ち欠いた土器片を立て並べている例が8軒で確認される。時期別には、Ⅰ期に2軒、Ⅱ期に3軒、Ⅲ期・Ⅳ期に各1軒である。

このようにみていくと、大型住居と中型・小型住居に階層差があるとすれば、集落成立当初からこの差が存在し、集落が本格化するⅡ期以降、主軸方向にも規制が生じながら、最終段階のⅣ期まで継承されている。ちなみに、後節で検討する墨書土器を出土した竪穴住居は中型である。

第4節 墨書土器とその背景

本遺跡から出土した古墳時代前期の墨書土器は、県内では初の例であり、全国的にも類例の少ない資料である。ここでは、墨書土器の様相とその背景について考えてみる。

出土状況

集落区分のB群のほぼ中央に位置するSI027竪穴住居跡より墨書土器が1点確認され、床面北東側に位置する炉の北側に接するように床面直上から出土している。覆土中に後世の攪乱がなく、他の供伴土器もほとんど床面直上からの出土であることを考えると、明らかに本住居の廃絶段階に存在していたものであり、後世の混入は想定できない。

土器と年代

墨書が書かれた土器は、口唇部が若干摘み上げられるいわゆる無頸壺で、小型品である。胴部中央に最大径を有し、底部を欠損しているが、小さな平底を呈するものであろう。内面に輪積み痕が残る。口唇部が三角形状に尖っているが、若干欠損するものの使用による摩耗はほとんどみられず、日常的に使われたものではないと思われる。また、胎土を観察すると、他の小型壺などと同様であり、他地域から持ち込まれたのではなく、在地産であることは明白である。古墳時代前期のこのようなタイプの小型壺はあまりみられないものであるため、本資料のみで年代を想定することは困難であるが、供伴する元屋敷形高杯や北陸系装飾器台の年代観から、宮尻Ⅲ期段階に相当すると考えられる。

文字

墨書は、無頸壺の口唇部に接するようにやや斜位に書かれている。また、筆が口唇部の上端に当たったためか、内面にも墨が付着している。近年出土例が増えてきている弥生時代から古墳時代前期の墨書土器に関しては、文字であるのか、あるいは墨や筆を使って書かれたものであるのか大きな問題である。本例における墨や筆の使用に関しては、墨の分析が現状では非常に困難であるため科学的根拠は呈示できないが、赤外線撮影によって明瞭に浮かび上がってきたことから、墨の可能性が高いと思われる。また、巻頭図版や第139図をみても明らかなように、起筆と終筆が明瞭である。詳細にみると、筆の毛先の割れや筆先が揃っていないためか、1画目の終筆部分がかなり細く伸びている。このような状況から、本例は筆を使用して書かれたことが明らかである。古墳時代前期の筆は国内では認められないが、朝鮮半島南部の慶尚南道義昌郡に所在する茶戸里1号墓¹⁰⁾から出土している。木棺墓の墓坑底に設けられた小坑の竹籠の中から、木製の軸に黒漆が塗られた筆が5本検出されている。現在見るような筆とは異なり、両端が筆先となるいわゆる両頭の筆である。この墓の年代は紀元前1世紀代とされ、この頃には既に朝鮮半島南部で文字

が使用されていたことを示している。この筆のもつ意味は、弥生時代から古墳時代前期の墨書土器を理解する上で重要な鍵を握っており、研究者によって度々紹介されている。本遺跡でも同様のことが考えられ、その点については、背景の中で若干触れてみたい。

文字の釈文については、いくつかの解釈が考えられる。候補としては、第138図に示したように、「久」・「父」・「文」の3種があげられる。古墳時代前期の同様の文字が認められないため、他例と比較することはできないが、ここでは、『書道大字典』をもとに考えてみる。第139図の①・②・③の字形はきわめて類似する。本例と比較すると、いずれとも読むことが可能であるが、あえて違いをあげるならば、「父」は1画目と2画目の頭が水平位置にあり、「久」・「文」は1画目が高く、2画目が低くなる。出土文字資料としては、9世紀代の資料であるが、茨城県ひたちなか市武田西塙遺跡¹¹⁾から出土した墨書土器「久保」の「久」をみると、字形的にも本遺跡の墨書土器ときわめて似ている。この書き方は古代では一般的にみられる。以上のような点を総合的に判断すると、現時点では「久」あるいは「文」と読むことがより妥当と考えられる。

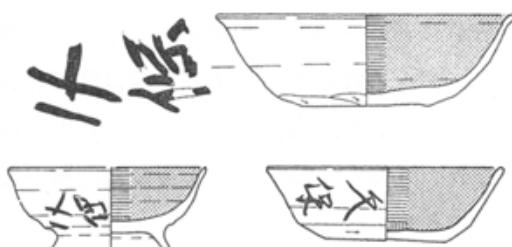
文字出現の背景

古墳時代前期の流山地域に文字資料が存在していたことに関しては、どのような背景で集落が成立したのかを考えることが重要である。まず本遺跡の成立時期を考えてみる。前節で呈示したように、弥生時代の集落がなく、3世紀中頃に突如大きな集落が形成される点が大きな特徴である。本遺跡周辺の遺跡を概観してみても、古墳時代になって集落が開始する遺跡が多く、弥生時代の集落はほとんどない状況である。このことから、本遺跡のような大規模集落が出現する背景には、他地域からの集団の移植を考えることがより妥当と思われる。その根拠として、本遺跡から出土した外来系土器の存在があげられる。地域ごとにみると、東海を中心に、北陸・畿内・駿河の影響がみられる。東海系としては、定着した元屋敷系の大形高杯、数量的には少なく客体的な存在のS字甕などがある。北陸系土器は装飾器台に限定して2点、畿内

系は布留甕1点、駿河系土器は大廓式の壺1点である。千葉県内における北陸系土器の出土遺跡分布をみると、東京湾東岸、手賀沼西岸から江戸川東岸及び茂原地域に集中する。本遺跡周辺では、柏市戸張作遺跡で類例が認められる。北陸系土器の千葉県への流入経路については、比田井氏によりすでに指摘され¹²⁾、北陸系土器は北陸から近江・東海西部を経由して太平洋岸沿いに東京湾に入ってくるルートが想定されている。同氏



第139図 釈文候補文字
(書道大字典1995より転載)



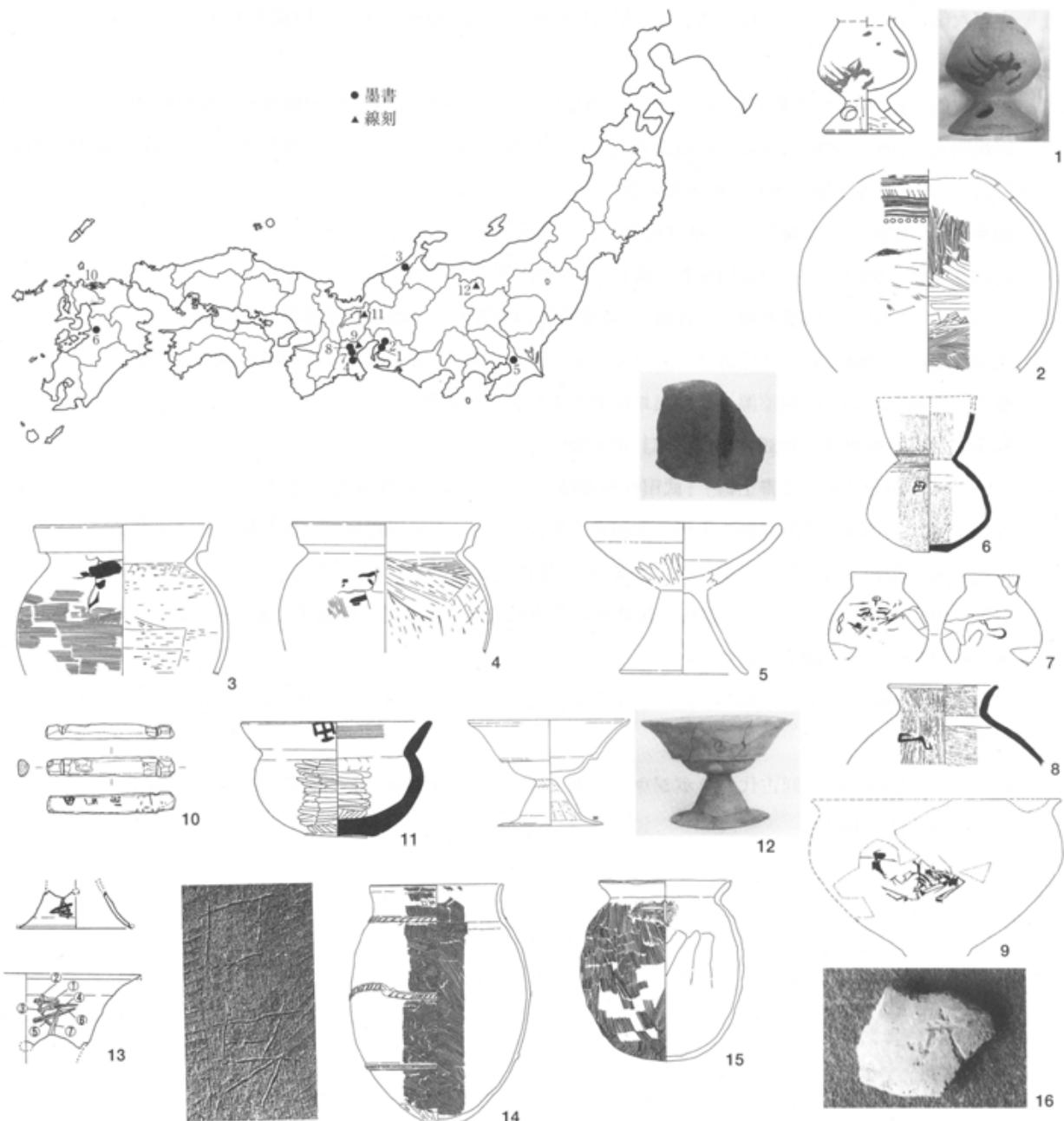
第140図 ひたちなか市武田西塙遺跡墨書土器

は、東海系のS字口縁甕も東海西部から太平洋岸沿いに東に向かい、東京湾に入つくるとされている。このことから考えると、本遺跡を含む東京湾岸に西からの土器が流入してくる西の拠点として、東海西部を含めた伊勢湾周辺が考えられよう。ただ、伊勢湾周辺から直接江戸川を遡つて流山の地に入つてきたかどうかは判断できない。むしろ、東海系・北陸系土器を多量に出土している市原市国分寺台周辺が第1次波及期の拠点となり、2次波及の段階で東京湾を奥に進んでいったと考える方が妥当と思われる。

一方、文字が書かれた土器が在地産であることも重要である。他地域で書かれた土器が入つてきたのではなく、在地の土器に筆を使って文字を書いたことは明らかであり、3世紀後期の本集落内に文房具を有し、文字を理解していた人物が存在していたことを示している。現在までに弥生時代から古墳時代前期の文字資料を出土した遺跡を全国的にみてみると、伊勢湾周辺に6遺跡が集中していることがわかる。他には、熊本・福岡・石川・滋賀・長野県に各1遺跡、そして本遺跡の千葉県1遺跡の合計12遺跡、16例である。墨書土器だけに限定すると、伊勢湾周辺の愛知県で2遺跡、三重県で3遺跡、石川県で1遺跡と本遺跡の、合計7遺跡、12例となり、地域的にさらに限定される。その分布をみると、先述した北陸系・東海系土器の伝播ルートと合致してくる。また、文字として理解されるのは、三重県貝藏遺跡・片部遺跡の「田」と本遺跡の「久」のみである。

以上のように、地域的に限定されながらも、各地で墨書土器の存在が確認され、今後も増加することが予想されるが、果たして、土器に文字を書くために墨や筆などの文房具を所有しているのであろうか。当時の状況を考えれば、本来は別の目的があったことを想定しなければならない。その解明には、先述した朝鮮半島南部に位置する茶戸里1号墓の存在が重要である。紀元前1世紀頃の墳墓から柄の両端に筆毛のある筆や重さを量る分銅と思われる銅環、削刀としての機能を有する刀子などが出土しており、平川氏は、「銅環はおそらく交易に際して使われたものと思われる」¹³⁾としている。律令期の荷札木簡に使用される筆や刀子を考えれば、当墳墓の被葬者は、交易に携わった人物であると考えられる。

朝鮮半島系の文物が千葉県内のいくつかの遺跡でみられる。日高氏は、松戸市行人台遺跡から出土した朝鮮半島産と考えられる鋳造鉄斧と多孔式甕を例にとり、太平洋沿岸地域の海上交通によって、東京湾沿岸地域から河川交通によって内陸部へ運ばれたのではないかとしている¹⁴⁾。また、田中氏も、朝鮮半島系の鉄素材の流入経路として、東京湾岸及びその河川沿いを指摘している¹⁵⁾。一方、三重県の津市から安濃町にかけて、伽那地域に近い石室構造を有する5~6世紀の朝鮮半島系の古墳が密集して築造される。滋賀県大津市でも大陸系の古墳が地域を限定して多数存在する。水野氏は、前者の伊勢周辺の例から、「朝鮮半島南端の人たち－伽那の人たちがこの伊勢津周辺に住みついている」とし、また、「安濃津」は、朝廷にとって関東との往来に際して最も重要な港であり、港湾管理のために朝廷から、文字を知るおそらく渡来系の人々が派遣されたのであろうとしている¹⁶⁾。先述した北陸系や東海系土器の伝播ルートをあわせて考えると、房総に朝鮮半島系の文物が流入してくる拠点として伊勢湾西岸地域、特に伊勢・安濃周辺が想定されてくる。宮尻遺跡が本格化するⅡ期以降、移住してきた集団の中に文字を理解する渡来系の人物が含まれていたとしても不思議ではなかろう。ただ、伊勢湾周辺から直接入植してきたかどうかは判断する材料を持たない。北陸系土器の第1次波及期の拠点と思われる市原市国分寺台周辺が大きな鍵を握っているのではなかろうか。



遺跡番号	遺物番号	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	種別	点数	文字等の内容	時期
1	1-2	鹿乗川流域遺跡群	愛知県安城市	自然流路	壺	墨書	2 不明		2世紀中葉
2	3-4	千田遺跡	石川県金沢市	大溝・包含層	甕	墨書	2 不明		2世紀中葉
3	5	川原遺跡	愛知県豊田市	包含層	高杯	墨書	1 不明		2世紀頃
4	6~9	貝藏遺跡	三重県一志郡遠野町	水路塙跡	壺・高杯	墨書	5 「田」他人面・記号		2世紀末~3世紀前半
5	17	市野谷宮尻遺跡	千葉県流山市	堅穴住居跡	無頸壺	墨書	1 「久」または「文」・「父」		3世紀後半
6	10	柳町遺跡	熊本県玉名市	井戸跡	木製鍛留め具	墨書	1 「田」他不明4文字		4世紀初頭
7	11	片部遺跡	三重県一志郡遠野町	水路跡	壺	墨書	1 「田」または「虫」		4世紀前半
8	12	城之越遺跡	三重県上野市比土	大溝田層	高杯	墨書	1 記号?		4世紀前半
9	13	大城遺跡	三重県安芸郡安濃町	堅穴住居跡	高杯	線刻	1 「奉」		2世紀中葉
10	14	三雲遺跡	福岡県前原市	溝	甕	線刻	1 「竟(鏡)」		3世紀中葉
11	15	大戌亥遺跡	滋賀県長浜市	祭祀遺構	甕	刻書	1 「ト」		3世紀中葉
12	16	根塚遺跡	長野県下高井郡木島平村	古墳墳丘	壺	線刻	1 「大」		3世紀後半

第141図 弥生～古墳時代前期墨書・刻書資料

- 注1 赤塚次郎 2001「Ⅲ弥生時代後期から古墳時代初頭」「川原遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター
- 2
- 3 赤塚次郎 1986「『S字甕』について」「欠山式土器とその前後」 第3回東海埋蔵文化財研究会
- 4 田嶋明人 1993「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」「シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討」 日本考古学協会1993年度新潟大会
- 5 加藤修司 2000「土器編年案」「研究紀要」21 財団法人千葉県文化財センター
- 6 比田井克仁 2004「受け口状口縁甕の出自」「古墳出現期の土器交流とその原理」
- 7 米田敏幸 1991「土師器の編年 近畿」「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」雄山閣
- 8 比田井克仁 2001「古墳時代前期における外来土器の展開」「関東における古墳出現期の変革」
- 9 藤下昌信他 1989『小滝涼源寺』朝夷地区教育委員会・白浜町
- 10 韓国考古美術研究所 1989『考古学誌』第1輯
- 11 平川 南 2002「IV 墨書き土器」「武田西塙遺跡」 ひたちなか市教育委員会
- 12 比田井克仁 2004「土器移動の実例－北陸系土器から－」「古墳出現期の土器交流とその原理」
- 13 平川 南 2000「古代社会と文字のはじまり」「墨書き土器の研究」 吉川弘文館
- 14 日高 慎 2005「松戸市行人台遺跡の鋳造鉄斧と多孔式甕－東京湾沿岸地域と渡来系文物－」「海と考古学」海史研究会考古学論集刊行会
- 15 田中 裕 2005「国家形成初期における水上交通志向の村落群－千葉県印旛沼西部地域を例として－」
同上
- 16 水野正好 1995「第3回古代シンポジウム「海・港・交流」発表要旨」「古代シンポジウム第1回～第4回」
三重県嬉野町教育委員会